

FUTURE COFFEE FARM の話

私は、1970年代に、8人きょうだいの家族の一員として生まれました。その当時、ほとんどのベトナムの農家はどこも同じように大家族でした。そして貧しさと空腹が常に家族につきまといっていました。長年母親は朝から晩まで働き、大変苦勞をして8人の子どもをしっかりと育てあげました。16歳の時、私は田舎を離れ、もっと良い暮らしを見つけるという希望を持ってホーチミンへ上京しました（私の故郷から1700キロ離れたところ）。

ここで、私はあらゆることをしました。作業員から管理の仕事、自分で店を開いたこともあります。見知らぬ土地で13年が過ぎ、29歳になった時、私はいくばくかのお金を貯めて結婚することにしました。それから都会での生活は、初めての子どもを授かったことで、私たち夫婦に困難/苦勞が加わりました。借家を転々したくありませんでしたので、妻には子どもを出産するために一旦実家へ帰ってもらい、一人で起業するためにラムドン省のバオロック（Bao Loc）へ行きました。このことは私一人で決めたことでした。妻はこのことを全く知りませんでした。このBao Loc行きに、私は13年前よりも多くの希望を持っていました。更により良い生活と家族の将来を安定させたいという強い思いがあったからです。

無人島に一人きりで

手持ちのお金もあまりなく、仕事の選択もできず、私は持ち金の500ドル全てを使って川の真ん中/中州にある小島と4頭の牛を購入しました。できる限りのあらゆる努力をして、無人島での新しい暮らしを始めました。一人暮らしだったので（妻は長女を出産するために実家へ帰っていたため）、自給自足で使えるものは全て活用しました。森の木を切って家を作り、牛舎を作り、魚は川に潜って採り、野菜は自分で栽培しました。自分で作れない塩や米、砂糖などの必需品は姉から借りました（1年後そのお金を返した時、彼女は米代だけ受け取りました）。その当時頃、お金がないことは普通でしたから、反対にお金があることは何か普通ではありませんでした。私はできる限りのものを節約しました。毎回町へ出る度にバイクを使います。しかし坂を下る時にはエンジンを切って坂を下り、進まなくなった時に初めてエンジンをまたかけて運転していました。ガソリン代を節約するためです。

一番お金を持った時の思い出があります。それはベトナムのお正月でした。私は叔父を家に招きました。無人島に住み、無いもの尽くしで、家の中にあるものと言えば、鍋と古いラジオだけです。電気もありません。全ての日常生活が5平方メートルの小屋の中に集約されています。（その状況を見て）叔父はとても心配していました。叔父がボートで島を離れる時、彼は憐れみと同情の混じった声で尋ねました。「お前はこの苦勞に堪えられるのか」と。そこで私は答えたのです。「余裕がある家族は子どもを大学に行かせます。私の家はきょうだいが多いですから、このことは、私の大学の5年だと考えています。もし5年後、失敗したら叱ってください。でも今はどうか私を応援してください」。家に帰る前に、叔父は持ち金の25万ドン（13ドル相当）全てを私にくれたのです。これも私が初めて起業した年で手にした最も多額の現金でした。

無人島で一人、大変な生活が過ぎていきました

実のところ、このような苦勞は私にとってはまだ普通のことでした。大変貧しい家族に生まれ、幼い頃から極貧の生活でした。その貧しさが私に希望を持ち続ける方法を教えてくれました。自分自身が努力することでいつの日か生活が更に良くなるという希望です。私は生活費を稼ぐために、トウモロコシとかぼちゃも追加して植えるつもりでした。牛たちは多くの子牛を産みます。そうすれば牛の事業も始められます。そのように考えると私は自分が大変だとは全く思いませんでした。この時期、最も私に足りなかったものはお金ではありませんでした。今お金があっても、私は何を買えばいいかわかりません。でもこの小さい島は私をとてつもなく孤独に引きこみました。妻と子どもにたまらなく会いたかったです。子どもが生まれてから、まだ一度も子どもの顔を見ていませんでした。ここで、唯一人の声を発するものは古いラジオだけでしたが、それも電波がある時とない時がありました。

いつも、誰かと無性に話をしたくなりました。

無人島での恐怖の経験

2007年の中部高原の雨季に、私が住んでいた場所は、大雨がなかなか治まりませんでした。狭い小川で急な丘という地形のため、大水はどんどん増水/上昇していきました。1カ月ほどはなんとか島に留まっていたのですが、ある日の午後また洪水が襲ってきました。かなり危険を

感じたので、私は家と牛たちを置きざりにして船で島を離れ、姉のところで寝かせてもらいました。小さなトタンでできた船は、氾濫した川の中を右往左往し、やっとのことで船着き場にたどり着くことができました。

その夜、雨はずっと降り続け、静まりませんでした。どうやっても眠ることができず、朝が来ると急いで島へ帰りました。目の前では、泥で濁った水がすごい勢いで島に流れ込み、牛舎を通過して家へ水が溢れていました/冠水していました。大木の根が増水した水で巻き上げられ、中州に転がっていました。もし水がこの速度で上昇していけば、あっという間に牛舎や私の家、そして牛たちは飲み込まれてしまいます。

姉はここに長年住んでいましたから、この状況がやってくるのが推測できました。島は沈みかけ、私の一番大切な財産である牛たちも流されようとしています。彼女は無言で座り込んで泣くだけでした。

天も泣き（雨が降り）、姉も泣き、そして私も泣きました。

しかし、座って泣いていてもどうにもなりません。私は牛たちを助けなければならないのです。勇気を振り絞り、小さな船をこいで不安定な中、氾濫した川を渡りました。初めにしたのは、牛たちを島の一番高いところに連れて行くことでした。それから小屋に戻りました。その時増水した水は既に膝まで来ていて、どうしたらいいかと考えていた時、突然あることを思いついたのです。なべを取り、燃やせるものをすべてその中に入れて燃やしたのです。燃えさかる炎の熱気が小屋中に広まり、私を暖かく不思議な気持ちにさせたのです。この時、私は『天の神様は私を見守って/慈しんでくれるから洪水が全ての財産を持って行くはずがない』と信じていました。

そうやってずっと考えていると向こう岸から私を呼ぶ声がしました。「Toiさん、私は/俺はここに何十年も住んでいるけど、氾濫して増水した水で、今までにこの島が沈んだ/飲み込まれたことはない。だから安心して船をこいで家に帰れ。今、ここはとても危険だ」。既に夜になっていた所以、私は船に乗り雨が止むことを願って帰りました。急な丘という地形のため、雨が降らなければ増水した水が引くのもとても早いのです。その通り、一晩経つと、雨はおさまり、水の流れは最初にやってきた時と同じようにあっという間に引いていきました。残された

光景には、何千㎡という沖積地/中州に水が流れ込み覆い尽くされていました。そこは生活を改善するために、トウモロコシを増産して養鶏しようと考えていた土地でした。

この年の恐ろしい洪水は今になっても決して忘れることができません。

「ここから始めよう」

妻が長女を出産して1年が過ぎた頃、私は長女を妻の実家に預け、妻だけをバオロックに呼んで一緒に暮らそうと話しました。初めて妻を島へ連れて帰る日、その曲がりくねって滑りやすい道を通して（実際数回は転んだのですが）、船を漕いで小さな家に向かいました。私の胸中では不安でいっぱいでした。そこに着くと周辺を一通り案内し、すぐに彼女へ尋ねました。

「ここに暮らすことはできますか」とすると妻は「できます。ここに住めますよ。ここから私たちは始めましょう」と答えてくれたのです。結婚する前、彼女は私がこんな遠く寂しい地でこのように苦労ばかりの状況になるとは思ってもみなかったことでしょう。もし、この時、妻が目の中の、この状況に堪えられないと泣き叫んでいたら、きっと今日の **Future Coffee Farm** はなかったでしょう。

彼女が泣いたなら、きっとここでの生活を全て捨てていたでしょう。

ゆでトウモロコシで貯めたお金で家を購入する

困難の日々を乗り切るために、私はいつも今よりも良くすることを考えていました。天の神様は誰からも全てを奪うわけではありません。何かを奪われたら、神様はそれに代わる他の何かを与えてくれるのです。神様は私に洪水の恐ろしさと同時に肥沃な沖積土/土地を与えてくれました。私は苦難を前に失望したわけではありません。冠水した土地を目の前にし、私と妻は増産計画を始めました。短期で収穫可能なトウモロコシを植えるのです。新鮮なトウモロコシを75日で収穫でき売りに行けるからです。

初めての収入はいくらにもなりません。あまりにもトウモロコシの値段が安かったからです。それで妻とやり方を変えることを話し合いました。新鮮なトウモロコシを直接売らずに、それを茹でて高い収入にしようというものです。考えたら実行する。私は叔父の家に行き普段酒を作っている大きな鍋を借りてきました。その日の夕方、新しいトウモロコシを収穫

し、深夜2時に起きてそのトウモロコシを茹でます。そして朝5時にそのトウモロコシを船に積んで岸まで運び、売りに行くのです。まだ空は明けていないので、坂道は滑りやすく通りにくく、足元も真っ暗です。それに対し、私はトウモロコシをどこで売るべきかさえ考えていませんでした。

アスファルトの道を適当に走っていると、ラッキーなことに、ちょうどミサをやっている教会を見つけることができました。私は1人の女性（お客さん）に『ゆでトウモロコシを1本1,500ドンで売っているのですが、もし買ってくれるなら1本1,200ドンにおまけします』と売り込みました。初めての客だったので大盤振る舞いをして20本買ってくれるように頼みました。肥沃な土壌と牛糞の堆肥で大切に育てたトウモロコシです。ですからおいしいはずですが、甘くて香ばしく、粘り気があるので、誰が食べてもおいしいと褒めてくれます。たった30分で、初めてのゆでトウモロコシを積んだバイクは見事に売り切れてしまいました。かつてないほどの嬉しい気持ちで急いで家に帰りました。妻が船を漕いで迎えて来ていましたが、「全部売れたの」と驚きの顔で尋ねられました。

「うん、全部売れたよ。これからの生活の糧が見つかった」と私は答えたのです。

そうして私たちはゆでトウモロコシ「商売」を続けることに決めました。ゆでトウモロコシ1本の価値は新鮮なトウモロコシの5倍の価値があります。私は小川周辺の沖積地20,000㎡を活用しその土地を10区画に分けました。毎週1区画を植えると10区画を植えるのに2カ月かかります。それから収穫に移ります。トウモロコシの実を売りに、幹は牛のエサにします。その収穫が終わったら今度はカボチャを植えます。カボチャもいい収入源になるのです。かぼちゃの葉や蔓は近所の親戚に売り、かぼちゃの実を町に持って行って売りました。

収入が入り始め、娘を呼び寄せ一緒に暮らし始めました。私たちは島を離れ、小さな家を借りることにしました。娘を川の中の危険な場所（島）へ住ませることができなかったからです。トウモロコシとカボチャの収穫で、私たち夫婦は3千万ドン（1,500ドルに相当）を貯めることができたので家を購入することを考え始めました。幸いなことに、7千万ドン（3,500ドルに相当）の家を見つけることができ、私はローンでの購入を申請しました。頭金に3千万ドンを払い、4カ月で残りの金額と銀行と同等の利子を払うというものです。

そのような理由で、私たちはまたトウモロコシとカボチャを増産し続けました。そして収穫期が来ると、4千万ドルという今まで考えてもみなかった大金が入りました。すぐにローンの残金を返済しました。その家は今でも私が暮らしている家です。もし皆さんがベトナムに来る機会があったら、ゆでトウモロコシとカボチャで建てた記念すべき家に遊びに来てくださいね。

人生を変える出来事

その頃、以前私が暮らし、今も作物の栽培をしている小島に水力発電所建設の計画が持ち上がりました。それで私は十分すぎるほどの高額な賠償金を手に入れました。そこで私はこのお金を全て使って7ヘクタールのコーヒー農園を購入することにしました。みんなからラッキーだったねと言われ、私自身も本当についていると思いました。

コーヒー農園を手に入れ、私は大勢の生産者がやっているように農園を耕し、栽培し、豆の精製をしていました。コーヒーはロンドン（先物）取引所を基準にしてトレーダーに売られます。後で知ったのですが、このような品質のコーヒーはその豆の中にあるカフェイン（を抽出する）ためだけのものでした。コーヒーではないのです。コーヒーは香りと味わい、甘味、まるやかさ、特別な酸味が揃って初めてコーヒーなのです。その当時の私は、なんの精製過程も行っていませんでした。きちんとした精製方法を行っていれば、その時点でかなりおいしいコーヒーになるのですが、その当時私は、精製方法がコーヒーの価値を決定づけるということを知りませんでした。

スペシャリティコーヒーを産み出す

2012年、私は、安定した良質のコーヒー豆を作るプロジェクトに参加しました。そこではプロジェクトスタッフが更に良質のコーヒーを作るために、栽培から収穫、精製までの方法を指導してくれるのです。しかし彼らの工程を遵守したとしても今より30万ドルぐらいしか収入増にはなりません。この技術指導の専門家が帰ろうとした時、家の前にある山積になった、モミや石が混じったコーヒーを見かけたのです。彼はこれが何のコーヒーなのかと尋ねました。それで私は、『これは夜中に鳥がコーヒーの実を食べて、その果肉とパーチメントの間にある蜜と糖分を吸った後に地面に吐き出したものです。もったいないと思うので乾燥して売ろうと思ひ拾い集めたものです』と答えると、彼は考える間もなく、それらをきれいにしてからホー

チミンに送ってほしい、あなたたちが通常販売している金額よりも高い値段で買い取るからと言ったのです。今でもよく覚えているのですが、その年の旧正月、彼はかなり高額のお金を送って来ました。その時私は自分自身に問いかけました。「もし正しい方法で完熟した豆を取れば、実際の価値は高くなるのかどうか」。

鳥たちが食べたコーヒー豆が高額で売れたことで、私はある考えがひらめきました。もっと高品質のコーヒー豆を作らなければならないと。鳥が食べた実は地面に落ちると地面の臭いがつきます。もしこれはきちんと管理することができて、生産過程に運用できるならきっと本物のスペシャルティコーヒーを作ることができるはずだと。

世界の生産方法を研究する

それから、私はハイクオリティコーヒー、スペシャルティコーヒー、そしてコーヒー全般に関連するあらゆることをインターネットで調べ始めました。その当時、スマートフォンはまだ限られた人のもので、インターネット回線が各家庭に届くというのは夢のようなことでした。私はインターネットカフェへ行き、飲み物1杯で一日中座りっぱなしで、栽培や精製、そしてカップリング方法に至るまでできる限りのことを探しました。

インターネットは本当に現代社会の奇跡的な産物です。私のように人里離れた土地の農民にも世界中のコーヒーの生産方法へアクセスできるようにしてくれます。完熟したコーヒーの実を収穫する必要があり、きれいに洗浄し皮をむき、発酵、ビニールハウス内の台の上で乾燥させる。衛生的であることはもちろんのこと、乾燥の過程では温度管理が必要なこと等々。新しい知識にアクセスし始めて1年後、私は **Future Coffee Farm** を世に出す計画を立てました。このブランドの名前は先生も一緒に名前を考えてくれました。**Future Coffee Farm** は、『将来のコーヒー農園』という意味に加えて『将来のベトナムコーヒーという夢を実現する』という意味も含んでいます。

言うは易しですが、新しいことを始めるということは苦勞する/大変な思いをするということです。私には資金がありません。ですから計画を実行するために、まとまったかなりの金額が必要でした。友人や借りられそうな人のところからお金を借りました。私は新しい技術を使ってスペシャルティコーヒーを作るという考えについて彼らに話しました。しかし話を聞いた後で、誰もが私が考え付いたプロジェクト/計画を信じようとしませんでした。何世代にもわたり、ベトナムの生産者/農民は従来のやり方で、伝統的な方法に従って、木を植え世話をし、完

熟している実もそうでない実も一緒に摘み、土の上で乾燥する、たとえその価値は高くなかったとしても売ることができてきたからです。更に兄は、この考えを聞くと、『そんなに高額な投資をしてその方法を取るなら失敗する。その豆が売れるかどうかもわからないのに』と反対されました。しかし私はそれらのことには耳を貸さずに、必ずこのプロジェクトを遂行することができると思っていました。私には資金だけが必要でした。そして私はすぐに取り掛かりました。

「良き行いをしていれば、良いことに遭遇する」という諺にもあるように、数回はお金を借りるのに失敗したものの、その後、心ある友人達は私にお金を貸すことを受け入れてくれました。できるだけ節約するために、私は今あるものを活用して「自給自足」の戦略を取ることにしました。森へ行き竹を切って来て細く割き、自分で棚をつくります。その時、豆を乾燥させる空間の面積は50 m²ほどでした。お金がありませんから、ビニールハウスも竹を使って自分で建てました。他の人の手を借りずに全て自分でやりました。生産工房も、鉄や鋼鉄、石、コンクリートを買ってきて自分で作りました。毎日、夫婦で1本の支柱を鋳造し1週間後に工房を作るために、8本のコンクリートの支柱を仕上げました。200 m²の工房を作るのに溶接機と電動のこぎり、鉄の切断機も購入しました。そうやって休みなしで3カ月が過ぎました。

未熟果実と完熟果実を分ける、浮いた実を掬う、土や石を取り除き、果肉を取り除くといったコーヒーを洗浄する機械に関しては、機械の業者に熱心に掛け合って交渉しました。彼らは7,500ドルのパルパー（果肉除去機）を、時期を分けて分割で返済することに同意してくれました。施設と機材への投資が完了し、私はドキドキしながら、コーヒーの実が熟す収穫期と新しい生産方法/工程が始められるのを待ちました。

そうして収穫の季節がやってきました。

そしてこれが本当の闘いの始まりでした。スペシャリティコーヒーを作るためには、パルパーがコーヒー豆 (ca phe thoc) に傷をつけないことが求められます。わくわくした気持ちはいつしかだんだんと不安に変わっていきました。パルパーを使ったら傷がついた豆の割合が多く、規定の水準よりもはるかに高かったのです。業者からは作業員2人を派遣して1週間修理をしましたが、解決することができませんでした。それでその機械を返却することを考え始めました。その時点で、私のコーヒーはかなりの量がだめになっていましたし、これからもっと

だめになるかもしれないと思ったからです。更に重大だったのは、傷がついたところから水が入り込んでコーヒー豆がお酢のように酸っぱくなってしまうことと、同時にそれが原因で悪臭を引き起す現象が発生したことです。豆が下水/排水溝のような臭いがするのです。（そのため）業者とはトラブルにならずに機械を返却することで合意しました。後でわかったことですが、この機械の種類はダラットのアラビカ種のみに適していたもので、ロブスタ種には適さしていなかったためでした。

コーヒー品質検査会社の社長、Luu Hoang さんの紹介のおかげで、私は別の機械を購入することができました。支払わなければならない費用は、その時大変高かったです。しかしすでに崖っぷちの状態です。後に引くわけにはいきません。引き続き、業者に問い合わせ、高品質のコーヒー豆を世界に輸出する計画の話を書きました。もう一度、彼らは私に共感してくれ、時間がかかっても分割で返済できるよう時期を分けてもいいことと同時にこの機械がきちんと稼働することを約束してくれました。しかし人の予測は天の予測にはかないません。この新しい機械を持ち帰った時、私は本当に期待していました。それなのにまた同じようなトラブルが発生したのです。常に許容割合を超えて豆に傷がつくのです。収穫の季節は過ぎていきました。全く生産できませんでした。機械のせいでだめになってしまった何十トンというコーヒーは売ることもできません。ワーカーたちの給料はその時払える限度を超えてしまっていました。このことは予測していなかった不運な出来事でした。全てのことが押し寄せてたまっていき、私から気力を絞り取っていきました。その時妻が初めて不安を口にしました。

『私たちはかなりの大金を投資したが、全て失って一文無しになるかもしれない…』

近所の人たちも好き勝手なことを言い始めました。そして友人たちや関係者の人たちさえにも広がっていきました。今まで自分たち夫婦のようなロブスタ種を作った人はいなかった、だからこれからもそんなことはできないだろうと。私の頭は一杯いっぱい爆発寸前でした。私は毎回エネルギー/やる気が必要な時はいつも、頭の中であるフレーズを繰り返し反芻するようにしています。それは「もし何かを始めたいのに辞めたいと考えた時は、それをワクワクして待っていた最初の日を思い出すのだ（初心を思い出す）」というフレーズです。その瞬間、私は『魚も流れに逆らって泳いでこそ最も強い魚になるのだ』と信じ、引き続きエンジニアたちにこの機械の問題を解決しようと励ましました。つまりコーヒー豆に傷がつく箇所を修理しさえすればいいのです。実際この機械はとても良いものなのですから。私たちは実験に専念し、

不具合の箇所を交換していきました。20日近くかかって各部分を調整、研磨した後、実験を繰り返し、傷がつく豆の割合を1%におさえることに成功しました。

その時は、確か深夜12時でした。私がコーヒーの山に埋もれてうたたねをしていた時、エンジニアたちの喜びの音が響き渡ったのです。その声は私や近所の人たちも目覚めさせるほどの声でした。「できた！Toiさん、成功しました」私は飛び起きて、こらえきれず涙を流しました。なぜならそこには私が望んでいたシルバースキンがそのまま残っているコーヒー豆があり、あまりにも幸せだったからです。

収穫の季節も残りわずかになった頃、私はやっと初めてのコーヒーを生産することができました。最初の頃は Fully Washed と Honey 製法の2種類だけでした。最初の年はそれぞれの精製方法で約1トンずつだけでした。

コーヒーを市場に出すまでのプロセス

困難だらけの収穫期が終わり、私はうきうきしてバオロックからホーチミンへ、ロブスタ種の豆を紹介するためにやってきました。一方にはコーヒーを担ぎもう一方には洋服を担いで1週間サイゴンのあらゆるところを歩き回りました。私は自分の作った豆をみんなが受け入れてくれるだろうという期待の気持ちで大手のカフェを訪ねました。しかしそうはなりませんでした。私の作ったコーヒーを飲んだ後で、ショップのオーナーはみな買わずに断るのです。「Toiさんのコーヒーは私たちのコーヒーとは違います。濃くて、苦味があって、黒くて、とろみ（粘り気）があるのが私たちのコーヒーです。でもToiさんのは、スッキリした酸味で、軽い苦味で客の口に合いません」と言われました。その後でわかったことですが、彼らが売るコーヒーは、コーヒーに加えて大豆やトウモロコシ、酒、バターを加えて作っているものでした。また私のコーヒーは今入荷しているものより値段がかなり高いためという理由でも断られました。

しかし私には『もし体に良くて安全で質の良い製品があるならば、きっと買う人が存在するはずだ』という観点を持っていました。それでもなんとか、かなりの時間をかけて、Future Coffee Farmの最初の客を見つけることができました。彼らは高品質のコーヒーを味わいたい少数の客のために焙煎を専門にしている業者でした。しかし彼らが支払った最初の数トン分のコーヒー豆の代金は、実際には生産費用を補うものにしかありませんでした。私は1人の生産

者です。もしコーヒーが売れなければ、家族を養っていくためのお金もなければ、返済時の支払もできず、借金も返せません。私は更にコーヒー農園に再投資するための費用も必要でした。その時期、生産費用ははかかなり大きいのに対して、コーヒーの売価はそれを補うのに充分ではありませんでした。そのため借金の山に埋もれる状況でした。私は、お金を貸してくれた友人を一軒一軒回り、機械を売ってくれた業者へ手紙を書きました。現在の苦境とともに、もう一度支援してほしいこと、借金の返済で足りない分は銀行同等の利子の利率で支払うからと述べたのです。幸いなことに、彼らはみな、それに賛成してくれました。

失敗続きの1年でしたが、私にとっては、お金では決して買うことのできない貴重な体験となりました。

次の収穫期に、更に品質を高めることができるように、私はコーヒーの知識を学び始めました。インターネットで見つけられる全ての資料を読み漁りました。農園の生態系を作り出すには、シェードツリーが必要なこと、コーヒーの甘みと風味をつくるのに、微生物肥料を使うこと、除草剤を使わないこと、完熟豆の糖度を測る機械を使うこと、正しい時期に収穫を行うこと、精製方法の段階をはっきり分けること、菌に汚染されないようにすること、発酵量、発酵温度、熟成槽のPH値、発酵時間、ビニールハウス内の温度を管理すること、未熟豆の欠点豆を認識（判別）すること、コーヒー豆の基準の水分量、保管/保存方法などなど…。

私は、精製方法とカップピングについての基礎コースにも申し込みました。その時期、私は自分のサンプル豆を各専門家へ送り、（その豆の）評価を依頼するとともに、次の収穫期を迎える前に、問題点があれば改善点を教えてほしいとお願いしました。コーヒーについて知れば知るほど私はコーヒーに夢中になっていきました。それから間もなく、私はアメリカに本部があるSCAAという、世界のコーヒーを研究する組織があることを知りました。彼らは、土壌のことから、品種、栽培、収穫、精製、焙煎、カップピングまであらゆることを研究するのです。更に興味深かったのは、これまでのコーヒー豆で、「コーヒーはこうしなければおいしいコーヒーとは言えない」という一つの公式のようなものがないことでした（つまり一つ一つのコーヒー豆にそれぞれのおいしさがある）。

私は、独学で研究しながら製品を開発し、同時に事業を拡大するためのマーケティングの方法も考えていました。そしてFacebookに自分の製品を掲載して紹介することを始めました。

これは安価で簡単で、効果的で、私ができる中で一番宣伝性のあるものでした。同時に潜在的な顧客にもサンプル豆を送りました。果てしない努力の結果、とうとう幸せが私に微笑みました。次の収穫期に向けて新しい注文を受けることができたのです。売値もよく、焙煎家たちは **Future Coffee Farm** の製品を専売的に販売することを申し入れてきました。

その中に、仲間たちで作っていた顧客のグループがありました。彼らは集まって **Future Coffee Farm** をパートナーに選んでくれたのです。この 5 人は私にとって最も印象深い顧客です。ハノイからバオロックまで 1,800 キロの曲がりくねった道のりを来てくれたことではなく、彼らが私に言った一言のためです。「私たちは良い製品を応援したいのと、Toi さんが更に先に進んでいけるような気持ちを持ち続けてほしいから、あなたのコーヒーを買いにバオロックまで来たんですよ。私たちはスペシャルティコーヒーに対するあなたに信頼を置いています」。私は起業してからずっと彼らが応援してくれたことに対する感謝の代わりに、この 5 人の顧客に向こう 5 年間は他より安い価格にすることを約束しました。1 年の生産経験と専門家たちからの助言とサポートもあり、2 度目の収穫期には前のより高品質でおいしい良い豆を生産することができました。その時期、私は乾燥場所を初期の頃の 4 倍の 200 m²へ拡大しようと決意しました。あと別の嬉しいニュースは、全ての顧客が新しい生産時期に入る前に費用の 50%を前払いすることを受け入れてくれたことでした。

不眠不休で試行錯誤したおかげで、最後には成功が訪れ、その神様が私に微笑んだのです。しかし私にとっての成功とは、社長になることやたくさんのコーヒーを作れるプランテーションの主でもありません。一人の生産者として高品質のコーヒー豆を生みだせたことこそが私の幸せなのです。コーヒーは交響曲のようなもので、私はがんばって良い楽器を作ります。しかし更にそこにはその曲を奏でる演奏者が必要なのです。おいしいコーヒーを作るには、焙煎を行う人、情熱を持っておいしいコーヒーを淹れる人たちがが必要です。（この数行の部分は、Toi さんご本人がベトナム語を修正するように依頼があり、それにそって翻訳しています。故にベトナム語の文と少し違ってきます）次の工程へ続くとき、私はいつもこのような人たちに会えることを期待するのです。私たちは別々の仕事をしていて環境も違います。抱える問題も異なります。しかし茶褐色の水（一杯のコーヒー）に魅せられて、それに注ぐ愛情は一つなのです。

本当に、コーヒーは私に言いつくせない素晴らしさを与えてくれました。

Future Coffee Farm のコーヒーを世界へ

友人たちの助けと、自分自身の努力のおかげで、4年後には高品質のコーヒーを作ることができるようになりました。私には日本、アメリカ、ベルギー、カナダ、台湾、韓国などに大口の顧客がいます。これらの市場は世界でも難しいと言われていて、私がコーヒーをそこで販売したいと憧れていたところです。海外の人たちと共にやり取りをする過程で、少し楽しい思い出があります。私は外国語がわからないので、彼らと話す時には、直接会う時も、Eメールやメッセージでも **Google** 翻訳のアプリを使います。もちろんこれは一つの良いツールですが、**100%**正確さを保証するものではありません。しかし不思議なことに、彼らは私が何を言いたいかを理解しているように感じるのです。大した問題にはならないのです。きっと私は何度も間違った言葉や文法を使っているはずですが、でもそれは妨げにはならないのです。そのことも、私のコーヒーが国境を越えていくのに後押しをしてくれました。

最後に、**Future Coffee Farm** で最も印象深く、最も特別な人についての話をしたいと思います。3年で4回会い、4回の渡越を通じて日本の市場へコーヒーを輸出する契約を正式に交わすことになった人のことです。おそらく私と彼の初めての協同イベントは**2019**年**7**月に横浜で開催されるコーヒーショウになるでしょう。

時は**2017**年（ベトナム語では**2016**年となっていますが、正しくは**2017**年のため修正しています）まで遡ります。現在私の顧客である、黒田吉範さんは、その年、ベトナムのコーヒーを知るためにホーチミンへやってきました。その時黒田さんはコーヒー見本市を視察し、その後 **The Coffee House** の **Hoa** さんと **Thuy** さんに会って、何種類かのサンプル豆を入手しました。その中に私のコーヒーもありました。1年後、彼は2度目の渡越を果たし前よりは長い滞在となりました。彼はとても印象に残っているサンプル豆があつてそれを探したいと言っていたのです。しかし彼が手に入れたサンプル豆のいずれもその豆とは違っていました。日本へ帰る便が**10**時間と迫っていましたが、彼は諦めずに **The Coffee House** の **Hoa** さんへ連絡を入れました。彼は前回試したスペシャルティコーヒーの豆を忘れず、その豆を探したかったからです。今でも私は黒田さんが私の豆を覚えていて、ここまで探しに来てくれたことに心から感謝しています。

黒田さんの電話を受けて、**Hoa** さんはすぐに私のところへ連絡をしてくれました。『1人の日本人がサンプル豆を探していて、私が思うにそれはきっと **Toi** さんの豆じゃないかと思う』

と。Hoaさんは黒田さんのホテルの住所にサンプル豆を送るように言いました。しかし私はそのようにはしませんでした。ホーチミンへ直接出向いてこの人に会おうと思ったのです。それからありがたいことに、HoaさんはTさんという通訳者も見つけてくれていました。小柄でベトナムに愛情を持っている女性です。私にとって黒田さんに直接会うことができるというのは大変重要なことでした。そして私たちは話をし、彼がコーヒーについてわかっていることや彼の考えをシェアしたのです。

ここで、更に重要だったのは、私が自信を持って作った新しいサンプル豆を彼に渡して、日本でカップングしてもらったことでした。以前、黒田さんはHoneyとFull Washedを試飲していましたから、今回はWiney HoneyとWiney Nature、それにWiney Red Honeyと冷発酵したFully Washedを用意しました。私も海外の人たち、具体的に言うと日本人がどのようにコーヒーを飲んでいるのか、どんな器具を使って淹れるのを好むのか、コーヒーについてどのように考えているのかを直接会って知りたかったのです。その時黒田さんがシェアしてくれた有益な情報のおかげで、更に良い精製方法へと改善でき、日本の市場でも通用する品質を生み出すことができました。新しい5つのサンプル豆を渡してからかなり長い時間話をした後、私は帰路につきました。そして私たちはFacebookやEmailでのやり取りを始めました。Tさんも、私と黒田さんの連絡時には通訳をしてくれることを引き受けてくれました。

黒田さんと別れて、私は新しいサンプル豆のフィードバック/感想を待ちました。そして翌月に黒田さんからの返事を受け取ったのです。カップングの結果はとても好評で、特にWiney HoneyとWiney Natureが良かったとのことでした。そして3度目の渡越のためにチケットを予約したという報告もしてくれました。今回彼はFuture Coffee Farmへ直接やってくるのです。私は彼がベトナムに戻って来る日を数えながら待ちました。

そして、その日がやってきました。私とTさんは早くから空港で黒田さんを待ちました。そしてタンソニャット空港（ベトナム語ではダラットのLien Khuong空港となっていますが、HCMのタンソニャット空港が正しいです）から200キロ離れた私の小さな家へわくわくしながら帰りました。今回は、黒田さんがFuture Coffee Farmの豆の生産過程を全て見て、理解し、確認してもらうための大切な視察です。その日々は、黒田さんにとっても私にとっても本当に1分1秒が素晴らしい時間だったはずです。1分1秒たりとも無駄にしたくなかったの、それぞれの精製方法を段階ごとに詳しく説明し、それぞれのコーヒーがどのようにしてできるのかを見せていきました。あっという間の視察が終わりました。もしかしたら緊張して

いたので時間がとても短く感じたのかもしれませんが、2018年、2度目の再会が終わり、彼は自分が気にいったサンプル豆を持って帰りました。

数カ月後、私は1通の手紙を受け取りました。黒田さんがまたしてもFuture Coffee Farmへ戻ってくるというのです。彼は2018-2019年の収穫期にここへ来て、私の家で住みこみしながら/ホームステイしながら私たち生産者と一緒に仕事をしたいということでした。このコーヒーの時期も特に重要ですから、3回目の再会になりました。他の理由でも今回は更に特別でした。スペシャルティコーヒーを作り出して4年後、ベルギーやアメリカ、イタリア、カナダ、韓国などの海外市場へ販促のために多くのサンプル豆を送り、感触のいいフィードバックを受けていました。しかしそれらの市場に対応するためには、私は自分の豆を更に上品な風味と香り、軽い酸味、苦味、甘味、複雑さ、そして後を引く味わいにする必要がありました。コーヒーへの理解を深めていくうちに、冷蔵庫で嫌気性発酵に関する資料を読みました。そこで、私は、イナックス製のビール樽とワインを醸成するための木樽のような専用の発酵用具と小さな冷蔵庫の設備に投資を行いました。冷蔵庫で発酵技術を駆使しながら、多くのコーヒー豆で実験を行う中、私は、Fully Washed, Winey Honey, Winey Natureで精製されたロブスタ種にとって、上記の発酵方法が最も適していることを発見したのです。

この実験は、黒田さんの3回目の訪問までに完成することができました。

たくさんの思い出ができたコーヒーの季節になりました。黒田さんが来て、私の家族や他の生産者たちと一緒に日常生活を共にしました。一緒に農作業をし、精製を行い、コーヒー豆を攪拌し、コーヒー袋を運んだりしました。コーヒーを作るのに必要なプロセスすべてに参加し、体験しました。彼に言わせるとこのことは必要不可欠なことで、コーヒーの生産方法について理解するとともに、生産者がスペシャルティコーヒーを作りだすのにどれだけ苦労を重ねているかを知る必要があるというのです。その時期、私たちはまだ話し合いの段階で契約などはまだ一切交わしていなかったにも関わらずです。帰国する前、黒田さんはもう一度私の豆を品質検査とカップングのために持ち帰りました。

20日後、私は黒田さんからの注文書を受け取りました。このことは人生の中で最も価値のある、そして最も思い出深いことの一つになることでしょう。嬉しさのあまり叫んでしまいました。長年何度も夢の中で見てきたようなそんな感覚は、口では説明しがたいものでした。しかしこの夢は現実/事実で、この喜びをどんな言葉でもいい表すことができないものです。私はや

り遂げたのです。Future Coffee Farm はできたのです。私のコーヒーは正式に日本からの注文を受けたのです。2019年3月、私はサイゴンで黒田さんと4回目の再会を果たしました。今回は正式な売買契約を交わすためです。彼は日本でFuture Coffee Farmのロブスタ種のスペシャリティコーヒーの専売契約/独占契約/正式代理店のパートナーとなりました。

契約書にサインをし終えた瞬間、私は自分自身に向かって話しかけました。更に努力を重ねて、幸せのコーヒーを作り出そう。きっと私のコーヒー、そしてベトナムのコーヒーは前途多望の未来が待っていると。川の氾濫で増水した水が押し寄せてきた時のこと、無人島での孤独な夜のこと、トウモロコシを売るために曲がりくねった道を走ったこと、(機械のせいで)傷がついてしまった豆のこと、エンジニアたちと徹夜した日々、断られた言葉、励ましの言葉、日中サイゴンの街を当てもなく歩き回ったこと、ベトナムや世界でもトップクラスの専門家たちとの話…、すべてのことが短編映画のように一度に現れて、複雑な想いも入り混じっていました。そして不意に胸中にあの小さな家の風景と初めて妻を連れて帰った日のことがよみがえったのです。彼女は少しも迷いのない目を輝かせて明るい顔で「できます。ここに住めます。私たちはここから始めましょう」という言葉を。

そうして私たちは実際に始めたのです。Hoaさん(配偶者の方の名前です)、本当にありがとう！(ベトナム語には名前が入っていませんが、配偶者の方への感謝の意なので、敢えて名前を入れました)

謝辞

以下の方々へ心より感謝申し上げます。

黒田さんへ私のサンプル豆を紹介してくれた The Coffee House の Thuy さん、
黒田さんとのミーティングの時にいつも通訳をしてくれた T さん、
アメリカ市場へ私のコーヒーを紹介してくれた Karmic Circle Coffee さん、
ベトナムで Future Coffee Farm の販売代理店をしてくれている、Babros Coffee Roaster の日本人オーナーのヤマオカキヨタカさん、
イタリア、ドイツ、オーストラリア、そしてカナダへ私のコーヒーを販売してくれてた Brim Coffee House さん、
ベルギーへ私のコーヒーを輸出するために購入してくれた Bi Viet 社の Hai Linh さん、

韓国で私のコーヒーを紹介してくれた Ji Jong Hong (韓国人) さん、
カナダへ輸出するために私のコーヒーを購入してくれた Duc Loc さん、

2019年5月25日 Bao Locにて
The Future Coffee Farm 創始者より